

## 見えないところにこそ、職業奉仕の心を

私たちリネンサプライ業の仕事は、日々の医療現場や介護施設の営みを、文字通り「陰で支える」ことにあります。スポットライトが当たることはありませんが、清潔で安心できる環境を整えることは、地域の健康と暮らしを守るうえで欠かすことのできない、大切な社会基盤の一部です。そんな仕事を続ける中で、私は一通の手紙に心を動かされたことがありました。

それは、長くお取引のあるクリニックの看護師さんから届いたもので、手紙の題名は「ズボンのボタンをつけてくださった方へ、そして米沢リネンサプライ株式会社の皆さまへ」でした。洗濯に出したズボンのボタンが取れていたにもかかわらず、お客様が気づく前に、当社の社員がそっと縫い付けて返してくれたことへの感謝の気持ちが綴られていました。しかも同じことが二度あったこと、そしてそのささやかな心遣いにどれほど励まされたかが丁寧な言葉で記されていました。

読み進めるうちに、「皆さまの健康と、会社のますますの広がりと繁栄をお祈りしています」という一文が目にとまりました。お客様が、私たちの幸せを願ってくださる。その温かな祈りに触れた瞬間、胸がじんと熱くなりました。

ちょうど終業前の時間帯でしたが、私はすぐに社員に手紙の内容を共有しました。聞いていた社員たちは、一瞬手を止め、驚いたような、でもどこか誇らしげな表情を見せてくれました。「そんなこともあったんですか」と照れくさそうに笑う者もいれば、静かに頷きながら耳を傾ける者もいました。誰が行ったことなのかは、特定しなくても構いませんでした。大切なのは、日々の業務の中で自然に生まれた小さな行いが、確かに誰かの心に届いたという事実でした。

特別なことをしたわけではありません。ただ、目の前にある仕事に誠実に向き合い、誰かの毎日が少しでも安全で、少しでも心地よくなるようにと、社員が当たり前のように行動しただけのことです。その「当たり前」の積み重ねが、お客様の大きな感謝として返ってきたのだと思うと、胸がいっぱいになりました。

この出来事は、「職業を通じて奉仕する」というロータリーの精神が、決して難しい理念や特別な活動ではなく、日常の業務の中の気づきと実践そのものなのだということを、改めて教えてくれました。私自身、ロータリアンとして活動するようになってから、職業奉仕とは、自らの専門性を生かし、周囲の人の幸せにささやかでも寄与しようとする姿勢であると理解するようになりました。華やかではなくとも、毎日の仕事の中にこそ、相手の心に触れる「奉仕の芽」は育つのだと、この手紙は優しく気づかせてくれました。

また、私たちの仕事は表に見えないからこそ、誠実さや責任感が試される場面も多くあります。しかしその「誰に見られていなくとも正しく行う姿勢」は、社員一人ひとりの成長につながり、やがて企業としての品格を形づくりします。見えない努力を尊重し合い、互いに高め合える組織であること。それもまた、私が大切にしたい職業奉仕のあり方です。

これからも、社員が胸を張って働ける会社、そして勤めて良かったと心から思える会社を目指してまいります。清潔なりネンを届けるという日常業務の向こう

には、医療や介護の現場で懸命に働く方々の安心、そして患者さまや利用者さまの安全があります。私たちの仕事が、地域の暮らしを支える一部として確かに役立っている。その誇りを忘れずに、これからも「見えない奉仕」を積み重ねていきたいと思えます。

小さなボタン一つに心を込めること。それが、私たちの職業奉仕の物語です。